

1.モダンライフを彩るモノたち



007 ブラウス
(昭和23~25年頃)



010 香水瓶
(昭和30年以降~平成)

003 山高帽子・ケース
(明治末~昭和戦前期)



005、006 トランク
(昭和初年代)

阪神間には、別荘を建てたり、家族の生活の拠点（別宅）を置くことで、郊外生活の理想を実現しようとしたモダンライフが出現しました。それは、職住分離の住まい方や生活用品などに及ぶ和洋二重生活でした。洋風のモノは、今ではありふれた鞆や帽子などの外出時の身だしなみを整えたものや、外出先の百貨店の広報誌など。着物を着、おばんざいを日常食とする当時において、それはモダンな香りあふれるモノたちでした。

花嫁衣裳や袱紗などの儀礼の品々が、伝統を継承する一方で、外出時の携帯用の小物たちは、社交生活の一端を物語るものでしょう。服装を整えるのは勿論、いろいろな場面を想定し、趣向を凝らした携帯用小物が大切に残されています。入念に整えられた小物たちには、外出や社交への意気込みや心構えのようなものも感じられます。

2.百貨店へ行く

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」



展示会場中央部分の展示ケースの様子



032-047 広報誌「みつこし」表紙
(昭和16～18年頃)

明治末期から大正期にかけて、呉服店から発展し、大阪堺筋に並んだ三越、長堀高島屋、白木屋、松坂屋が昭和に入って、私鉄のターミナルデパートとして誕生した阪急百貨店、高島屋南海店、大軌百貨店があり、西洋型の近代的なライフスタイルを提案する、消費生活の舞台となりました。

S家コレクションにも、百貨店のノベルティグッズや刊行物が含まれており、阪神間の居住者が大阪の百貨店で買い物をしていたことが窺えます。

3.ホテルへ行く

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」

055、056 婚礼用振袖(昭和6~7年)

甲子園ホテルで挙式をした際に着用された振袖。京都で誂えられた。文金高島田に角隠し、引き振袖姿の着用写真が残されている。



ホテルは、西洋文化の導入装置として、阪神間の居住者のライフスタイルに組み込まれていました。

現在、教育の場として活用されている「武庫川女子大学甲子園会館」は、もとは昭和5年（1930）に建設された「甲子園ホテル」です。フランク・ロイド・ライトの弟子、遠藤新が設計し、「東の帝国ホテル・西の甲子園ホテル」とも称されました。甲子園ホテルは、リゾートホテルとしての顔と同時に、大阪の迎賓館として、関西を訪れる著名人が滞在したことで知られます。一方で、阪神間で暮らす人々にとって、会食や宴会の場として親しまれ、地元のロータリークラブや婦人会の会合にも使用されました。営業期間は昭和19年（1944）までのわずか14年で、海軍病院、のちに米軍将校宿舎となり、昭和40年（1965）に武庫川学院が譲り受けました。

ここでは、「阪神間居住者にとってのホテル」に焦点を当て、宴会の場を彩ったモノや、会合の様子を示す写真資料を中心に、紹介します。

049~051 甲子園ホテルリーフレット など
(武庫川女子大学甲子園会館 所蔵)



左/053 木曜クラブ集合写真(昭和12年4月10日)
右/054 サースデー倶楽部関係書類(昭和7年~昭和11年頃)



4. 格式のしるし

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」



072、073 打掛(大正9年)



078 油単(大正9年)



壁面/061 慶事用袱紗／庭山耕園(明治末期)
062～064 弔事用袱紗／庭山耕園(明治40年)

S家コレクションには、家紋がくっきりと付けられた道具類が多くあります。昨今ではあまり見られなくなりましたが、紋を付けることは、古くからの仕来りとされ、冠婚葬祭の室礼のための道具類には欠かせないものでした。

婚礼によって親類づきあいが広がり、その間で贈答のやりとりが始まります。そこで使われる紋のついた道具類は、家の象徴として、家と家との交流を物語るものになります。家紋は、最も顕著な格式のしるしであり、それぞれの紋が、それぞれの出自を示しています。

5.社会への参加・貢献

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」



会場1階展示ケースと壁面



091~140 徽章・記章・紀章・会員章など

S家コレクションには、徽章・記章・紀章、あるいは会員章・記念章・有功章と表記された授与の趣旨が窺えるバッジが含まれます。

明治21年の「大坂慈恵会 会員章」と銘記されたものが最も古く、最も新しいもので昭和25年の「日本赤十字社 男 特別社員章」です。紀章の多くは明治期に授与されたものです。

帝国在郷軍人会の会員であることを示したのものや、第5回内国勸業博覧会（明治36年、大阪で開催）の名誉会員章などからは、当時の社会的要請が炙り出せます。一方、天満宮や橿原神宮への寄進との関連を示唆する紀章も含まれ、地域に根差した信仰との関係も垣間見えます。ささやかなバッジから、「殖産興業」「富国強兵」など、明治期からの国家的な要請が身近な生活に及び、それに応えた薬種問屋当主としての姿が見え隠れします。

6.船場の店先から

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」



左/141 銭袋(昭和28年以前)
右/142、143 書類入れ

阪神間に移り住み、郊外生活を謳歌したのは、大阪・船場の富商といわれる人々でした。

船場とは、大阪市中央区北西部にある江戸時代からの商業地で、北を土佐堀川、東を東横堀川、西と南を現在は埋め立てられている西横堀川と長堀川に囲まれた地域を指します。「株の北浜」、「薬の道修町」、「繊維の井池」を有する、大阪経済の中心地です。S家は、文化5年（1808）に和漢薬などを扱う薬種問屋を道修町で創業しました。

彼等がかつて暮らした船場は、職住同居、店では番頭さん丁稚さんが住み込みで働き、店の奥では御寮人さん、ぼんぼん、いとさん、女中さんが生活する町でしたが、阪神間などへの移住に伴い、職住分離となり、船場は住む町ではなく、働く町へと変貌していきました。

江戸時代～明治初期に使用された道具・生薬原料などの歴史資料は、S家創業の事業所に保管されていますが、当館のS家コレクションにも、当主が身近に置いていたと思われる仕事道具が数点含まれていました。堅実な仕事ぶりが目に浮かびます。

7.女性の趣味生活

武庫川女子大学附属総合ミュージアム
2020年度特別展「阪神間モダンライフ」



145 絵更紗見本(昭和45年)



左/149 絵更紗 名古屋帯／竹尾千代(昭和45年～平成)

右/151 絵更紗 名古屋帯／竹尾千代(昭和45年～平成)

阪神間の生活に基盤を置いたのは、四六時中ここで過ごすことになった女性やその家族たちでした。

大阪道修町に開業し、芦屋浜に広大な別荘を構えた医学者、高安道成博士の夫人・やす子の郊外生活などが、典型的なモダンライフの一端として知られています。そこでは女性たちだけのネットワークを作り、親睦の会を催し、趣味の生活が展開されました。昭和10年頃に火災によって再建された高安邸では、日本間の襖や戸棚はすべて、やす子夫人手製の絵更紗で飾られていたといえます。

ここで取り上げる絵更紗の生活用品や図案は、芦屋に住んだ竹尾千代（～2010頃）の制作品の一部です。元井三門里（1885～1956、絵更紗の創始者）の作品を、仲間とともに模倣に徹して精力的に制作しました。